

岩澤信夫講演会

農業っていいなあ

～不耕起農法と生き物たちで地球環境を守ろう～

2008年11月30日（日）

東京大学農学部

主催 大蔵の田んぼを育む会

共催 J-SRI 研究会

協力 東京大学農学部アグリコクーン

目 次

1. 農業っていいなあ
～不耕起農法と生き物たちで地球環境を守ろう～
岩澤信夫 (1～9)
2. 主催団体等紹介 (10)
3. 協力団体紹介 (11)
4. 実行委員会 (12)

岩澤信夫氏プロフィール

1932年、千葉県成田生まれ。旧制成田中学（現・県立成田高校）卒業。果物や野菜の栽培法研究に没頭。ハウス栽培が普及していなかった60年代末～70年代初頭に、いち早くハウス栽培に近い技術を試し、スイカ、メロン、イチゴの栽培などで実績を上げる。70年代後半からコメ作りにも着目し、試行錯誤のうえ85年に「不耕起移植栽培」を提唱。各地で農家への技術指導を行うなどの実績が認められ、2008年度の吉川英治文化賞受賞。著書『不耕起でよみがえる』（創森社）がある。

日本一安全なお米のつくりかたを勉強したい方へ
日本一安全で日本一美味しいお米を食べたい方へ
日本一安全なお米を自分でつくりたい方へ

農業っていいなあ ～不耕起農法と生き物たちで地球環境を守ろう～

吉川英治文化賞受賞

田んぼ博士 日本不耕起栽培普及会会長

岩澤信夫

1：日本一安全なお米はどの様に栽培したら良いと思いますか？

日本一安全なお米を生産するには、肥料も農薬も一切使わないで自然の中で栽培することです。「そんな夢の様な話が本当にあるの」と疑問を持つ方が多いでしょう。大学の先生も大半の農家もこの話は疑います。話す私も当初は疑いました。本当に肥料を与えなくて稲は育つのだろうか。農薬がなくて病気や虫が出たらどうしようと。しかし、不耕起移植栽培では、農薬も肥料も使わないで、生きものたちの働きによって、お米が穫れるのです。まだ、何処の大学でも研究機関でも、理論的にも科学的にも証明が出来ていません。

2：現代科学で証明出来ない農法

科学的な証明とは、なぜそうなるかという事を数値で証明しなければなりません。その数値も理論も何もない私達の農法は本物と認定されていないのです。その本物でない農法と米を皆さんに紹介しようとしています。私達農民はなぜそうなるかという数字に表れるプロセスよりも、こうすればこうなるという再現性のある結果を大事にしています。取れるか取れないか。美味いか美味くないか。安全か不安全か。この結果を翌年の栽培法に活かして来たのです。再現性のある本物を紹介しようと思います。

3：本物か嘘なのか、耕さない田んぼの米

この農法は毎年周囲に比べて 100kg 程度増収しています。私達は耕さないで去年の稲株がそのまま残る田んぼに、直接田植えをする不耕起移植農法を全国に普及している団体です。なぜ耕さないのかというと自然界には土を反転した場所はないのです。道端や野山は永遠に土の天地返しは起こりません。ミミズやもぐら以外は耕しません。これが本当の自然の姿で自然農法は田畑を耕せば自然とは言えなくなります。山には一抱えも二抱えもある大木があります。山へ行って肥料をやったという話は聞いた事がありません。でも、山の土は団粒化し、肥料もやらないのに大木が育ちます。です

から稲の生育に対しての条件を整えれば、お米も穫れるのです。

4：現在の田んぼは機械化農法が作った化け物

今も昔も田んぼは田んぼに見えますが、実は現在の殆んどの田んぼは田んぼではないのです。田んぼになったり翌日は畑になったりする化け物なのです。コンバインなどの重量機械を走行させる為に、面積を大きくして規格化して地下に暗渠排水の集水管を埋めてあるのです。用水路は潰してパイプライン化して排水路はコンクリートの三面張りになっています。都市の上下水道の構造を田んぼにそのまま持って来たのです。従って昔の様な水溜りはなくなり稲刈りが終われば畑になってしまうのです。1年のうち稲を育てる4ヶ月だけが田んぼで、あとの8ヶ月は畑です。

5：間違いだらけの機械化農法

手作業で行った昔の稲作は重労働でした。機械化はこの重労働から農民を解放してくれました。素晴らしい事ですが反面多くの問題を抱える様になりました。一番の問題は化学肥料と化学農薬の洪水を招いた事です。2000年の日本の歴史の中に化学物質の投入はなかったのです。なぜ化学物質がなければ稲作は出来ないのでしょうか。それは機械化が悪いのではなく方法手段が悪いのです。更に稲づくりを工業化し合理性の追求をするから、物を作り、物を使い、物を消費して物を作るという、工業化社会の一面が浮かび上がります。物を作るには大きなエネルギーが必要です。私たちは工業的に稲や米を作るのではなく、自然に学び稲の生理生体と持っている力を活かしながら、稲を農業で育てています。稲づくりの工業化はだめです。

6：農業はエネルギー消費産業だ

今の稲作は、或る試算では10aで1750の石油が必要だとされています。私達は知らない間にエネルギーの消費産業になっていたのです。資源枯渇の時代を迎え、もうすぐ石油が無くなり、今日のような機械化稲作は出来なくなります。代替エネルギーが開発されれば別ですが、皆さんが家族を持つ頃にはお米が食べられなくなるのです。その時はお金が幾らあっても何も買えなくなっています。アメリカが日本に輸出してくれると思いますか？ アメリカの大規模機械化農業、大量にロッキー山脈の地下水を吸い上げて砂漠化を進める農業は、いずれ成り立たなくなります。そうしたらアメリカから買える穀物もなくなります。パンもラーメンも、家畜のエサの穀物もです。無資源国の日本はどうしたら良いのでしょうか。食べ物がなければ人間は生きてはいられません。今から真剣に考えましょう。

7：無手勝流のやらずぶったくり農法の開発

「そんな馬鹿な」と言う農法が見つかったのです。不耕起移植栽培を20年間も追い

続ける中で色々な発見がありました。その中でも際立った発見はイトミミズの存在です。稲刈り直後の田んぼにコメヌカを撒き直ちに水を張るのです。するとイトミミズが 1000 万匹以上にも増える事が分かったのです。彼らは地下 5~10cm 下の有機物や微生物を餌にして、膨大な排泄物を地表に吐き出します。この排泄物が 5cm にもなり雑草の種子を覆います。除草剤を使わない田んぼが出現したのです。更にこの排泄物の中には膨大な肥料分が含まれていたのです。化学肥料の要らない田んぼが出来たのです。

8：田んぼは生きもの宝庫だった

耕さない田んぼには稲刈りの時に刻んだワラが絨毯の様に敷かれています。そこへそのまま田植えをしますのでワラは水中分解をします。ワラの養分を栄養源に植物プランクトンが大発生します。植物プランクトンが発生すればそれを食べる動物プランクトンも大発生します。更にそれを食べる原生動物へと食の連鎖が起こります。次はそれらを食べる昆虫類や魚類や貝類・両生類と多くの生きものたちが増えて耕さない田んぼは生きもの楽園になるのです。勿論田んぼの生態系の頂点である鳥類が集まってきます。害虫は天敵が増えてバランスがとれて悪さをしなくなります。

9：耕さない田んぼは酸素発生装置だった

生きものは嫌気性の微生物を除き酸素がなければ生きられません。ワラを基点に大発生した植物プランクトンの大型の代表的なものにサヤミドロという藻類があります。このサヤミドロは真夏の水面を覆い水中で光合成をして酸素を放出します。従って藻類の発生した田んぼの水は溶存酸素量の多い田んぼになるのです。隣の田んぼは除草剤で藻類も殺され酸素がなくて生きものが生きられないのです。耕さない田んぼの生きものが爆発的に増えるのはこの酸素のお陰だったのです。

10：生きものいっぱいの田んぼの価値

田んぼはこの冬期の湛水をすれば何処でも生きものいっぱいの田んぼは出現します。米を 500 俵生産する農家は 500 人の生命を預かっています。更に 500 俵の米を生産する田んぼの生きもの命も預かっているのです。生きものは田んぼと同じく子供達や孫達に引き継がなくてはならない日本の財産なのです。機械化農法はこの視点が残念ながら欠けていました。畑にメダカもドジョウも住めない喩え、稲刈り後の田んぼの維持手法に配慮がなかったのです。今からでも遅くはないのです。

11：生きもの達の奏でる生物資源型農法

田んぼの生きもの達の生命活動で稲作をすると言う発想は世界中にありません。しかし、私達が 20 年間も追いつけた不耕起移植栽培に、冬期湛水と言う手法を重ねる事

によって花が開いたのです。1994年に提案した宮城県田尻町でマガンのグリーンツーリズム作戦で、マガンが訪れた冬期に水を張った田んぼは雑草が生えなかったのです。マガンが食べたにしては辻褄が合わなかったのです。3月中旬にシベリアに帰った後、5月中旬の田植えまで雑草が出なかったのです。ベジタリアンの彼らだけではなく別の要素があると調べたら、イトミミズやユスリカの幼虫などの土壌生物の仕業だと分かったのです。今では4万羽のマガンが訪れラムサール条約の締結地になっています。

1 2 : 生物調査の結果に唖然

会報誌で知らせ全国規模で冬期湛水を実験してみたら地表にトロトロ層が発生し、生物調査をしてみるとイトミミズが1000万匹以上もいる事が分かったのです。今でも農家の大半はイトミミズが田んぼにいるとは思ってはいません。しかも数千万匹もいるとは予想も付きませんでした。彼らの排泄物は年間15トン以上にもなり、これが雑草の種子の上を覆って雑草の発生を抑えていたのです。除草剤不要のメカニズムは、田んぼ本来の生きものの活動によって生まれたのです。

1 3 : 耕さない田んぼの水の浄化機能

水道の浄水法に緩速ろ過方式があります。200年前に英国で発明された手法ですが、浄水池でゆっくり水をろ過する際に、浄水池の表面にメロシラと言う珪藻が発生します。メロシラは水中で光合成をして酸素を吐き出し、その酸素によって微生物や土壌生物のバイオマスを形成します。有害物質や有害菌はこの生物層が皆食べて水を綺麗にします。この方式を緩速ろ過若しくは生物ろ過と言われ、耕さない水田のメカニズムは緩速ろ過の浄水場と全く同じメカニズムだと判明したのです。

1 4 : 耕さない田んぼの浄水能力

浄水能力はラフな計算ですが、稲作をするには10aで約4ヶ月で1800トンの水が必要だと言われています。残りの8ヶ月に水を張れば約5000トンの水が使われます。これが緩速ろ過機能で綺麗になるとすると、お米の収量は約500kgですからお米を毎月10kg食べる家庭は毎月100トンの水を浄化している事になります。1ha当たり50000トンの浄化量は、水田面積が国土の7%もありますので忽ち河川湖沼の水は綺麗になる量なのです。これを遮っているのは取水権なのです。

1 5 : 耕した田んぼはガス発生装置

地表のワラを地中深く鋤きこんだ田んぼは、メタン細菌に餌を与え大量のメタンガスを発生します。ある資料によると最大値65kgにもなり、不耕起の田んぼは5kgで十分の一以下と測定されました。メタンガスはCO₂に比べて容積比20倍、重量比50倍の地球温暖化に寄与すると言われています。日本の田んぼのメタンガスは総排出量

の21%が発生していると言われていています。勿論一緒に有害な硫化水素も発生しています。耕すと言う事は石油を消費するだけでなく環境破壊も引き起こしていたのです。この問題は今後国を挙げて真剣に考えなければなりません。この問題は、後述の排出権についての考え方をよく読んでください。

16：カドミウム問題

厚生省は、米に含まれるカドミウムが1ppm以上を含む米をカドミウム汚染米と言い、この米を生産する地域を土壌改良の必要性を指摘しています。国の指摘をされると地名が公表され困ると県独自で対策をしている所があります。新潟県信濃川流域、阿賀野川流域。秋田県雄物川流域、米代川流域などです。これは古い鉱山に水系が汚染されている地域です。共に日本の有名な米の産地で公表はされていません。知恵ある人達はこの地域の米を避けています。日本は火山国なのでカドミウムに含有が多い国なのです。被害の有名な事例は富山県神通川流域で発生したイタイイタイ病です。

17：冬期湛水・不耕起栽培をするとカドミウムは十分の一以下になります

冬期湛水と不耕起移植栽培を重ねると、田んぼの土壌は常に酸欠で還元状態のままです。カドミウムは還元状態の時はリン酸やカルシウムなどと固い結合をして溶け出しません。存在しても溶け出さない為稲が吸収しないのです。耕起をして土壌に酸素を与えると酸化分解され溶け出します。常に水を張って酸欠にすることで安全な米が生産される事が分かって来ました。

18：私達の会は畜産由来の堆肥の使用を禁止しています

今の日本の畜産に疑問を持ちませんか？ 生き物を生き物として扱わず、工業化・効率化が優先しています。狭い畜舎の中、ウィンドレス（窓が一つもない）鶏舎にたくさんの家畜が閉じ込められ、死ぬまでその中で不健康に暮らします。そんな不健康な生き物の肉や乳や卵をたべていて、皆さんは健康になれるのでしょうか？今の畜産飼料は、大半がポストハーベストを受けた遺伝子組み換え穀物です。畜産飼料には大量の飼料添加物が混入されています。この中には抗生物質やホルモン剤などが含まれています。エサに混ぜられた抗生物質は、家畜の体内に入るとどうなりますか。遺伝子組み換えの仕組みを習った人には想像がつくでしょう。動物の腸内には大腸菌やサルモネラ菌が居ます。遺伝子組み換え実験で使うのと同じ細菌類です。抗生物質をエサと一緒に食べた動物の腸内では腸内細菌の変異株が大量に発生します。それが糞として排泄されます。さらに堆肥化され濃縮され変異株が増えます。その、変異株入りの堆肥を田んぼや畑に入れるとどうなるでしょう。その畑で取れた生野菜には変異株がついていないと保障できますか？ 私達人間が病院で使用している抗生物質は約100トン、畜産飼料には1000トン以上が使用されているのです。堆肥由来

の栽培である有機農法などは変異株（耐性菌）の中で栽培されているのです。このような畜産堆肥を作ることを奨励している人は、将来、自分や家族が病院に入ったときに院内感染にかかっても、文句を言わないでください。私たち日本不耕起栽培普及会では、畜産堆肥の使用を禁止しています。

19：悪魔の農薬「ネオニコチノイド」

最近の情報として米国のミツバチの大量死がマスコミで報道されました。日本でも九州や東北ではこの現象が発生し、何れも原因不明と言う事になっています。何しろミツバチが帰巢して巣箱の中で死ぬのではなく、一箱そっくり居なくなるというのです。一箱毎に群れで移動するのではなく蜜の採集に出たまま帰らない。米国では40%の巣箱が全滅し更に範囲を広げているようです。ミツバチによる交配で種の存続を維持している植物は多い。この植物群は今後、種の存続が出来ない事になります。自然の生態系が一瞬の内に破壊されてしまいます。被害は植物だけではありません。生態系の一員である動物にも被害は続出ています。最終的には人類も生態系の頂点であるから被害は出ます。従ってこの被害はミツバチだけの問題ではなく、昆虫類は元より全ての生物に影響し土壌生物や微生物に至る広範囲に影響が出ている様です。皆さんは気が付いていたかどうかは知りませんが、今年の秋の関東の水田は赤とんぼの飛来が極端に少ない。孵化して彼らは涼しい山奥に餌場を求め、産卵の時期になると大集団で大移動して水田を目指す。今年の水田は赤とんぼが帰って来ないのです。生物調査をするとイトミミズの数が例年より少ない。知らぬ間に私達の水田にも被害の波が押し寄せているのかも知れません。他にスズメが少なくなりシギ・千鳥の飛来も少なくなっていると言われていています。ネオニコチノイドの毒性は神経毒であらゆる生物に何ppmではなく、ppmの1000分の1の何ppb単位で作用しているようです。脂溶性ではなく水溶性である為植物は水と一緒に吸収してしまいます。一般の水和剤などはドリフトの範囲が100m四方で、風があっても500mの範囲であります。ネオニコチノイドは馬鹿苗病の菌糸と同じく4km四方と範囲が大きい。それは蒸散して大気に取り込まれ拡散を繰り返すからです。これだけの拡散範囲は使用地が点でも忽ち面になる可能性が強いと言わねばなりません。いま中国発の食品に農薬が含まれ世情の大きな話題になっています。日本でのネオニコチノイドの使用量は中国の100倍、原爆並みの物が100倍なのです。私達の馴染みの農薬アトマイヤーの製剤は、カメムシやウンカの特効薬として稲作に使用されています。その量たるや膨大なものです。使用範囲は広く野菜やペットのノミ退治やシロアリ退治にまで使われています。市販の野菜の20%にはネオニコチノイドが含有しています。それを毎日食していると思うとぞっとします。猫の首の付け根に農薬をつければ家の中中に農薬が飛散してしまいます。農業大国フランスでは、最高裁判所がミツバチ消滅の犯人はネオニコチノイドであると判決をくだしました。フランス政府が疑わしきは罰せずの態度で、処置をしなかつ

たのが養蜂団体との軋轢で提訴。この日本でも司法に訴えなければ早急には解決しないかも知れませんね。私達の何も使わないイネつくりの主役は生きもの達であります。この生きもの達が消滅したのでは農法は成り立たなくなります。由々しき一大事が発生しているのかも知れません。特に主役であるイトミミズは2~4ppmで半数が死滅し、0.2~0.5ppmで精子奇形やDNA損傷が起こると言われています。不耕起移植栽培の救世主がカメムシ退治の薬で全滅したのでは話になりません。私達の売りは何も使わない農法、無肥料・無農薬であります。この方程式が崩れてしまうのです。ネオニコチノイドの拡散が広いのは、水溶性で水蒸気となって拡散するからです。4kmも移動しては今後有機栽培も安全栽培もこの日本では成立せず無になる可能性があります。疑わしきは罰せずではなく、一日も早く使用を止めなくてはなりません。

20：排出権

化石燃料の高騰は世界規模の事で単に日本のみではありません。その要因は表立った事柄は需要と生産の経済原則であります。その裏側では投機マネーの暗躍と資源枯渇の不安が想定されています。一方エネルギー消費に伴って発生するCO₂・N₂O・H₂Sによる地球温暖化は緊急の対策が必要です。その時に稲作分野では冬期湛水と不耕起移植栽培の組み合わせによる新しい手法が開発された今日、無駄とも言える耕起の繰り返しは、非常にもったいない話であります。水田面積200万haで換算すると、ha当たり200ℓ以上の石油消費でありますから、単純に40万トン石油が消費されることとなります。これは表の顔で裏では切りワラや切り株が土中深く鋤き込まれ、嫌気性菌であるメタン細菌にエサを与える為に大量のメタンガスの発生を促します。ある試算によると10aの最大値は65kgにも達すると言います。耕起を伴わない不耕起水田は切りワラ・切り株共に地表にあります。従ってその最大値は5kgと言われています。差し引き60kgの量はCO₂に換算しますと容積比20倍、重量比50倍でありますからCO₂=3トンに換算されます。ha当たり30トンでありますから200万haが不耕起栽培に変身すれば6000万トンのCO₂を削減出来ます。夢でもあり夢でない話でもあります。実はこれだけの話で終わりではないのです。メタンガスを発生する有機物の分解時にはCO₂とN₂O・H₂Sなど地球温暖化に寄与する物質が大量に発生します。今まではこれらのガス類は自然発生的な物としてカウントがされていません。この発生量を科学的に測定をしてCO₂に換算すると、数百倍にもなりその数値は膨大なものになります。現在の基盤整備による土壌改良は単に機械化農業の為に存在し、泥炭層などの酸化によるメタンガスやCO₂の発生量などはカウントされていません。昔の沼沢地や新しい開拓地などは泥炭層が多く存在し、乾田化に伴う酸素供給はこのガス類の発生を免れません。稲作に伴う温暖化ガスの発生のみでなく基盤整備そのものが発生源になっています。これを止める手段は冬期湛水を伴う不耕起移植栽培による土壌の還元化の維持にあります。有機栽培などの堆肥の大量投与もこのガス類

の発生を助長します。環境問題を語るならこのアキレス腱であるガス発生装置の扱い方を緊急に対処すべきであると思います。農水省は今地球温暖化対策の一環として農地自身の炭素の吸収を考えています。中干しを1週間程度延ばし土壌を完全に乾かす。するとメタンガスの発生量が減る。これは当たり前の事でその前提が耕起にあることを見逃しています。耕起をしなければメタンガスの発生は激減するのです。その対策で切りワラを回収してコンポスト化する。すると約 25 パーセント程度排出量を減らせるといっています。012 年までにワラの鋤き込みを 4 割程度まで減らす計画があります。不耕起をする者が考えると実にナンセンスな話をしています。ワラの回収には機械が必要で堆肥場に運ぶにもトラックが必要であります。堆肥の切り反しには機械で何回もの反転が必要だし大きな堆肥場も必要になります。また堆肥場よりトラックに載せ水田に運びそれをマニアスプレッターの様な機械で撒布し、何回も反転して耕起を繰り返えします。そのエネルギーは化石燃料を使い堆肥場などの設備や機械類の購入には膨大な資金が必要であります。だから夢の様な話と言うしかありません。大量の堆肥を投入すればメタンガス以外の CO2 や窒素ガスや硫化水素が発生します。メタンガスの換算率は容積比 21 倍であります。硫化水素などは 300 倍にもなります。堆肥化するには堆肥場で発生するガス類も計算に入れなければなりません。この思い付きと言うしかない計画を国家戦略に据えるのは実にお粗末な話と言うしかありません。不耕起に直接の省燃費、化学肥料や農薬不要の省エネは計算されていませんが、これを加算すると数値は更に大きくなります。これからは大学も研究費を自分で稼ぐ時代です。キャップアンドトレードは、日本の企業が出す分を、外国から買うのではなく、企業間の取引だけではなく、消費者を巻き込んだ国民皆農と同じ運動を展開する時代です。排出権を外国に支払いするのではなく、日本の不耕起水田の農家への直接支払いをすれば、お金は日本の中を駆け巡ります。この方法を含めて研究をして実践して戴きたいと思います。国がやればいろいろな条件を付けたり、外郭団体が甘い汁を吸おうとして、日本の農家にお金が直接落ちません。大学が不耕起水田のメタンガス排出量を測り、慣行（一般）水田との差を明確にして、キャップアンドトレードで、日本国内の都市と農村を結んでください。消費者も農民も環境意識が高まり、このコメを 10kg 消費すると CO2 が 60kg 低減するという意識が持てる様にしましょう。

2 1 : 日本のお米の価格はまちがっています

皆さんは、お米を 1 k g いくらで買って食べていますか。自宅でご飯を炊く場合、学校の食堂で食べる場合、コンビニ弁当のご飯やおにぎり、レストランのご飯。農林水産省の統計データを検索して調べてみてください。平成 16 年度の米 1 k g の生産にかかる農家の負担は 300 円、農家が玄米を農協に販売委託する価格が 220 円でした。80 円の赤字です。現在は化成肥料は倍以上に跳ね上がり、ガソリンや灯油も当時より 2 倍の価格に跳ね上がっていますから、農家がかけている経費は 350 円にも 400 円にも

なります。お米は作れば作るほど赤字ですから、高齢化したり、農業機械が壊れたりしたら、米つくりを辞めて耕作放棄をする人が多いのです。皆さんが将来、家庭を持って安全で美味しいお米を食べようと思ったら、もうお米を作ってくれる人も売ってくれる人も居なくなっているかもしれません。今から自分の食べる分を自分でつくるか、信頼できる農家さんと生物トラストの関係をつくって、適正なお米の価格を支払い、将来の分まで作ってくれるように契約したほうが良いと思います。グローバル化による米の市場開放は、小規模農家をみんな潰して破産させてしまいます。その後、資源枯渇で化石燃料がなくなれば、エネルギー消費型の農業そのものが成り立たなくなります。さて、皆さんはどうしますか。

2 2 : 自然耕塾

私達、日本不耕起栽培普及会は、耕さない田んぼの稲作技術の塾を開講しています。年間 12 日に及ぶ開催で毎月第一土曜日を予定しています。今年は希望者が殺到し第二教室を翌週に設定します。農水省の就農準備校にも登録していますが、農薬と化学肥料で攻め込む化学農法は 100 校もあります。徹底的に安全を迫及した農法を教えている塾は私達だけです。定年後農的生活を希望している方、安全な米は自分で作り自分で守ろうとする方、国民皆農を目指している方は是非受講して下さい。眼にうろこの一年間を過ごして下さい。なお、来年の自然耕塾はもう受講申し込みがいっぱいで、受付が終了しました。

2 3 : 普及会へ入会のご案内

私達日本不耕起栽培普及会は出入り中の門戸を持たない団体です。自分の進むべき道と米つくりの王道を極めたら、己の技を後輩に伝えてくれたら本望と思っています。無資源国家の日本はこの母なる地球の資源が枯渇したら、人間の基本となる食べものが一番先に無くなる国です。人口を守る耕地が無い事と維持する手法に欠けている事です。一日も早く何も使わなくても米を生産出来る技術を普及して置かなければなりません。愛する子ども達や孫たちの時代には間違いなく飢餓の世紀は訪れます。農民だけではなく、今、職種や年齢に関係なく会員を募っています。その人達がこの日本を救う原動力になって下さる事を願っています。

参考文献としては拙書、創森社『不耕起でよみがえる』を参考にして下さい。

URL <http://www.tanbohakase.com/>

<http://www.geocities.jp/fukoukisaibai/>

日本不耕起栽培普及会 会長 岩澤信夫

事務局 東京都狛江市泉本町 1-36-1-1112

Tel 03-3430-2304/0478-72-3989

2. 主催団体等紹介

(1) 大蔵の田んぼを育む会

地元農家から田んぼを借り、2001年より不耕起栽培による米作りに取り組む。東京都町田市立大蔵小学校卒業生の保護者、元大蔵小教員、地元農家、地域住民を中心とした組織。自然あふれる貴重な田んぼを育み守ることを活動の基本とし、米作りを通して地域の文化と環境を育み、みんなから愛される田んぼを目指している。

小学校の米作り体験学習を支援する他、イベントとして農業体験の場を設け、希望者を広く受け入れている。また、東京農業大学の学生が中心となる学生部会は、ボランティアで小学校体験学習の支援を行うなど活動に協力している。

ホームページは <http://members2.jcom.home.ne.jp/okuratanbo/>

(2) J-SRI 研究会

マダガスカルに着任したロラニエ宣教師が、農民の所得向上のために稲作技術を研究し、片山の理論などをもとに確立した新しい稲の栽培法 SRI(System of Rice Intensification)について、研究等を行うための団体。

SRIに関する情報を収集・蓄積することを通して、日本の SRI 情報センターを目指すとともに、国内および海外における SRI に関する学術調査研究を推進し、SRI の普及に寄与することを目的としている。そのため、共同研究を実施し、定例研究会（2か月に1回程度）やシンポジウムを開催し、研究資料の収集・配布を行っている。

事務局は東京大学農学部内、ホームページは <http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/j-sri/>

(3) 東京大学農学部アグリコクーン

AGRI-COCOON (アグリコクーン)は東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部に開設された「産・学・官・民」の連携による、農学教育のさらなる発展と充実を図る機構。専攻や専修の枠を超え、幅広く学べる場を大学院生・学部学生に提供する新しいプロジェクト。順次ワークショップやゼミナールを開催。

詳細は <http://www.agc.a.u-tokyo.ac.jp/> 参照。

本シンポジウムについては、アグリコクーン農学における情報利用研究フォーラムグループが協力。

3. 協力団体紹介

(1) 筑波大学農業ヘルパー派遣会社 (筑波大学)

私たちは農家からの労働力の要望に応えるために、学生に農業バイトを体験してもらうために、農業の発展のために活動している学生団体です。12軒の生産者、71人の学生ヘルパーと契約しています。

社長：仲野翔 筑波大学生物資源学類3年

<http://www.geocities.jp/agrihaken/index.html>

agrihaken@hotmail.com

(2) 海外研究部 (日本大学藤沢キャンパス)

広く海外に知識を求め教養ある国際人になろう

求め拓く心、海より深く、理想 天空までも・・・

海外研究部は、50年前、移住を目的で作られた部活です。

古くからT (Think), S (Study), W (Work) という合言葉を念頭に置きながら、農業を部の伝統として、日々海外に広い知識を求め、人と人との融和を大切にしながら活動しています。

(3) HATAKE 組 (日本大学藤沢キャンパス)

私たちは有機で野菜をつくっています。

畑は大学内の森を抜けたいいところにあります。

土と、人とふれあい、実践から学んでいます。

今期の目標は『1人1作物を育て、販売し、

みなで美味しく「いただきます」「ごちそうさま!』です。

(4) エコクローバー (日本大学藤沢キャンパス)

自然破壊や環境汚染、世と中の矛盾に嘆いていても何も良くなりません。私達 ecoクローバーは「身近な所からおかしいと思ったことを変えていこう!」を合い言葉に、学生として地球人として、自分達の活動を通してメッセージを伝えようとしています。

http://www.geocities.jp/brs_eco_clover/

4. 実行委員会：大蔵の田んぼを育む会学生部会

小清水 公彦	(委員長、東京農業大学)
木村 美知子	(東京農業大学)
望月 崇央	(東京農業大学)
野口 綾子	(東京農業大学)
大竹 満智子	(東京農業大学)
横田 知秦	(東京農業大学)
草深 あゆみ	(日本大学)
鈴木 一枝	(日本大学)
肥田 優子	(日本大学)
望月 新太	(日本大学)
藤原 潤子	(早稲田大学)
仲野 翔	(筑波大学)